

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第五主日(7/17)礼拝

「命の言葉はつながれてはいない」

使徒言行録第5章 17 節から第 5 章 42 節

【聖書】

使徒言行録 5:17 そこで、大祭司とその仲間のサドカイ派の人々は皆立ち上がり、ねたみに燃えて、18 使徒たちを捕らえて公の牢に入れた。19 ところが、夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、20「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言った。21 これを聞いた使徒たちは、夜明けごろ境内に入って教え始めた。

一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの長老会全体を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。22 下役たちが行ってみると、使徒たちは牢にいなかった。彼らは戻って来て報告した。23「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」24 この報告を聞いた神殿守衛長と祭司長たちは、どうなることかと、使徒たちのことで思い惑った。25 そのとき、人が来て、「御覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、境内にいて民衆に教えています」と告げた。26 そこで、守衛長は下役を率いて出て行き、使徒たちを引き立てて来た。しかし、民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった。

27 彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。28「あの名によって教えてはならないと、厳しく命じておいたのではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」29 ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。30 わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。31 神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。32 わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証しておられます。」

33 これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。

34 ところが、民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルという人が、議場に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、35 それから、議員たちにこう言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にしてください。36 以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。37 その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた。

38 そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、39 神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」

一同はこの意見に従い、40 使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話しはならないと命じたうえ、釈放した。

41 それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、42 毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。

1 信仰と洗脳

元首相を射殺した犯人の家庭環境が話題となっています。正式名称は変わっていますが、所謂、統一教会の信徒であった母が、家庭が困窮する程、膨大な額の献金をしたので、犯人の人生が大きく狂わされたことが、動機とのこと。オウム事件以来三十年間、日本では、このような新興宗教関係の事件が起きる度に、繰り返し、「宗教は人を洗脳する危険なものだ」と声高に言い広められてきました。今や、多くの日本人が、信仰と洗脳の違いが判らなくなっているように思います。ある若いクリスチャンが、高校に入って仲良くなった人に主イエスの素晴らしさを語り、教会の礼拝に誘ったところ、「それ、洗脳じゃないの?」と言われたそうです。

勿論、聖書の神を信じることは洗脳とは違います。真の御神は、被造物である人間をご自身と向き合うことができる独自の存在とうけとめ、その自由意志を尊ばれるお方。それは神の独り子イエス・キリストを殺す事さえ黙認された所にもよく表れています。万物の創造者であり支配者であるにも拘わらず、洗脳によって人を強制的に支配するのではなく、招き続けるお方です。聖書全体は、この神の招きに溢れています。「神を信じ、神と自分と人を愛して生きる命」へと私たちを招きます。この招きに応じて、主イエス・キリストを通して神を信じた人々の内には、それまでの人間では考えられないような新しい愛の業を行った人々も多くいます。マザーテレサやキング牧師、他にもたくさんのキリスト者達。「**悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。**」(ルカ6:43)という主の言葉どおり。私たちが十字架と復活の主と仰ぐイエス・キリストこそ、良い木であり、マザーテレサやキング牧師は、その言葉と行いでキリストを証した人々。誰もマザーテレサやキング牧師に対して「あの人は洗脳されている」と言う人はいないでしょう。

ですがその一方で、教会とキリスト者は、イエス・キリストから離れてしまい、愛とは正反対の事を行い、大きな過ちを犯したし、犯している事も現実です。今も続いているロシアのウクライナ侵攻をロシア正教の偉い人達が支持しているのもその一つでしょう。この世の権力と教会の権威が結びつく時、私たちは間違った方向に行ってしまうがちです。この事からも、神を信じているからと言って、洗礼を受けたからと言って、自動的に私たちが神の御心を理

解し行うことはできないのは明らかです。私たちは、自分達が何をすべきなのか、いつも新しく求め考え、神に祈り続ける必要がある、神の御心をいつも新たに求め続ける必要があります。

7/3の礼拝で聴いた説教で、渡辺善太牧師が「クリスチャンは聖書を熟読味読して信仰的判断を学ぶべきである」と、取り次いでくださった通りです。信仰的判断はすぐにできるようになるわけではないでしょう。日頃から訓練する必要があり、練習する必要があります。私たち、一人一人が、目を開けてしっかりとこの世界の、人間の現実を見つつ、神の御心を祈り求めつつ、聖書を通して今、為すべきことを考え判断する、それを普段から行って学ぶのです。

2 帰納的思考

この「信仰的判断」を学ぶ上で、重要なヒントがあります。それが「帰納法的」に物事を考えること。横浜ナザレン教会出身の旧約学者並木浩一先生が、2007年に日本ナザレン教団の主催するユースセミナーに講師として招かれました。その時の講義の記録が、日本ナザレン教団から「創世記を読む」と言う冊子で出版されています。その冒頭で、並木先生は「帰納法的に掴み取る聖書の真理」と題して、次のように記しています。少し長いのですが、引用します。「聖書の面白さは『真理というのはこうだ』と言わないところにあります。幾何学のように公理があつて、そこから定理が引き出されて、真理が証明されるという『演繹』の体系の書物ではありません。聖書の真理はそれと反対で『演繹』と対比させて言えば『帰納』です。『人生の中で結局こういうことが真理なんだ』というのが聖書の論法。ですから聖書じたいの論法に従って、帰納法的に聖書を読むことが大事です。人々は長いイスラエルの苦難の歴史を経て、『私たち人間とは、神の御心とは、こうなんだ』と聖書が語っている、という具合に帰納法的に考えるのです。しかも聖書自身がそれまでの考え方をどんどん修正して、新しい見方を積み重ねていくのです。それが聖書の面白いところです。この事情は、私たちが聖書を読む時に参考になります。私たちも實際上、何度も聖書の読み方を更新していきます。『以前読んだときにはこうだ、と思った、しかし、どうもそうじゃない。こうなんじゃないか』。そのように私たちに新しい見方を可能にしてくれる書物なのです。(中略)各時代の課題を聖書に読みこんだのです。その時代の考え方、体験を通して、『真理とは、こういうことではないか』と読みこんでいく、そういう次第です。」その通りだと思います。

今日の聖書にも、この帰納法的な考え方が現れています。それは「民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエル」の発言です。ガマリエル先生は、テウダの乱とガリラヤのユダの乱で現実に起こったことを語ってから、次のように提案します。「そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」このガマリ

エル先生の考え方は、自分達の立場や利害や考えから即座に判断を下すのではなく、成り行きをよく観察して、「神の御心はこうなのではないか」と考える、帰納法的な考え方です。

神は、人間の考えを超えた想定外の新しいことをなさり、全く新しい状況をつくり出すお方です。だから、私たちは、たいがい、あとになってから、「ああ、あれが神の御心だったのか、神の慈しみだったのか」とわかるもの。先ほど、交読文で共に読み交わした詩編23篇の最後には次のようにあります。「命のある限り、恵と慈しみはいつも私を追う。」「恵と慈しみが私を追う」というのが面白い。それは、「神の恵みと慈しみが分かるのは、後からが多い」という意味もあるのではないかと、思います。「その当座は分からなかったが、今は分かる。神は確かに恵を与え慈しみを注ぎ、苦しみの中、私たちを守り導いてくださっていた。神の名が褒めたたえられますように！」と賛美する事は、実に多くのキリスト者が経験する事です。

3 天使による使徒たちの解放

今日の聖書で、そのような「帰納法的」な「信仰的判断」をしたのは、ガマリエルだけではありません。「聖書は、『どうやらそういうことではないか』という帰納法的に書かれている」という並木先生の言葉から、今日の聖書を読み直すと、「主の天使が使徒たちを牢獄から解放させた」というのも、帰納法的な解釈だ、と言えらると思います。ルカの記す「主の天使」が、大きな翼を持ち、白い輝く衣を着て、一目見るだけで人間ではない事がわかる異質な存在だ、と考える必要はありません。使徒たちを牢獄から解放した者は、きっと、一見、ごく普通の人々。自分や自分の親しい者が使徒たちによって癒されたり、使徒たちの証を聞いて「主イエスこそ、神からのメシア」と信じるようになっていた人々が牢獄の番兵の中にも何人もおり、神が、彼らの心に勇気を与え、使徒たちを牢獄から解放させた、というのは十分に考えられる事です。何しろ、大祭司が使徒たちを尋問の際に、「お前たちは、自分達の教えでエルサレム中をいっぱいに行っている、満たしている」と言うほどに、主イエスのみ名と教えと共に使徒たちの評判は広がっていたのですから。もしそうなら、「主の天使」が、牢獄の戸を開けただけでなく、使徒たちを解放してから、しっかりとその戸を閉ざしていたことも説明がつきます。

しかし、それが事実であっても、使徒たちが牢獄から解放された事は、神が使徒たちの解放を望み働かれたからだ、と考えられます。その後の使徒たちの行動がその根拠です。彼らは、サンヘドリンに引き出され、主と同じように十字架刑で磔になるかもしれず、命の危機にありました。彼らを脱出させたのが、番兵の中にいた回心者達の思いだけなら、彼らは使徒たちに「一刻も早くエルサレムを離れてください」と願ったでしょうし、使徒たちもその通りにしたでしょう。ところが、使徒たちは真逆の事をしました。命の危険から救い出されたにも拘わらず、自分達を逮捕した神殿守衛長達の本拠地である神殿の境内に戻って来ました。しかも、黙って息を潜めて潜伏するのではなく、人々の前に姿を現し、最高権力者の大祭司から「それだけはしてはならない」と厳しく禁止されていた主イエスのみ名によって民衆を

教えていたのです。

教会に伝えられたこの使徒たちの驚きの行動から、「牢から使徒たちを解放したのは神の御心であったに違いない」と、後代の教会に生きたルカは信仰的に判断し、使徒言行録に書き記したのではないのでしょうか。使徒たちの常識外れの、そして「なんとしても命の言葉をあまねく語りたい」という熱い思いを感じさせる行動に、ルカは神の御心を見出し、19節「夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、『行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい』と言った。」と確信を持って記したのでしょうか。そして、それは真理である、と私は思います。

4 聖霊の照明

やはり、使徒たちの行動は、人間の考えでは説明が付きません。ガマリエル先生のように成り行きから「帰納法的」に考えれば、「今夜、牢から脱出できたのも、大祭司たちには捕まるな、エルサレムから脱出しろ、というのが神のみ旨だろう」との「信仰的判断」をするほうが自然です。私たちもそのように自分達に都合よく判断をしがちです。

しかし、その逆「神殿の境内で教えることが神の御心だ」と使徒たちは信仰的に判断しました。彼らは、どのようにして、神の御心を確信したのでしょうか。聖書には何も書いていませんが、確実に言えることは、使徒たちが一生懸命祈った、ということです。そして、祈りのうちに、主イエス・キリストがどのように語り、何を行われたかを思い起したのだと思います。

主イエスはエルサレムへの旅の途中で弟子たちに言われました。「友人であるあなたがたに言うておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。」(ルカ福音書12:4) 又、主はエルサレム神殿で弟子たちに次のように語りました。「人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張っていく。それはあなたがたにとっても証をする機会となる。だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしはあなたがたに授けるからである。」(ルカ福音書21:12~15)

これらの主イエス・キリストの言葉を思い起し、祈り考えて、使徒たちの心に確信が与えられたのではないか、と思います。「ああ、あの時の主イエスの言葉は、この時の為であったのか！このような意味があったのか！私たちが今エルサレムから逃げるのは神の御心ではない。エルサレムの中心、神殿において、主イエスの十字架と復活を、命の言葉を残らず語る事だ。きっと又逮捕されて、最高法院に引き出されるだろう。しかし、そこでも必ず主を証する言葉は与えられる。主イエスをイスラエルの人々に証する為に私たちは、解放されたのだ。いや、その為に私たちは生まれてきたのだから。」

このように確信した時、使徒たちの心は、喜びに満たされたでしょう。何故なら、彼らがこのように確信できたのも、彼らに注がれている聖霊なる御神の力だったから。聖霊の御力によって与えられる確信は、私たちに、神の命と神との平和、人知を超えた命と平和を与えて

くださいます。「肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります」(ローマ8:6)とある通りです。

早朝の神殿の境内、神に祈りをささげて一日を始めようという人々に向かって、のびのびと、晴れやかに喜びに満ちて語りかける使徒たち。その様子には、彼らが少し前まで牢獄に繋がっていたような気配は全くありません。まさに、以下の使徒パウロの言葉が真理であることを確信させる光景です。「この福音のために私は苦しみを受け、犯罪人のように牢に繋がられています。しかし、神の言葉は繋がれていません。」(テモテⅡ 2:9)これは今日の物語よりずっと後、使徒パウロが迫害を受けて牢獄に繋がれている時に、愛弟子テモテに書き送ったであろう手紙の一節だと言われています。パウロが苦難の中に得た喜びの確信です。

5 語りかける聖書の言葉

そして、「神の言葉はつながれてはいない」というこのパウロの言葉こそ、今日の聖書のみ言葉を通じ、父なるみ神が私ども横浜ナザレン教会に、今、この時に語りかけている言葉ではないか、と私は信仰的に判断しました。コロナ禍が始まって二年半、伝道活動は制限され、礼拝に集う人がめっきり減りました。未だコロナは収まるどころを知らず、神奈川県だけで一日に8000人近い人が感染するという第七波がやって来ています。

又、横浜ナザレン教会は、ここ九か月で三人の方々が病に倒れました、祈りを重ねていますが、疲れも覚えます。別に二人の方がそれぞれの事情で礼拝に来ることができなくなりました。そのような現実に加え、私は、ここ一か月で、思いもしなかった人間の深い罪の現実、自分の中にある罪の根深さにもぶつかりました。まるで罪と死に絡みつかれまわりつかれ、狭い牢獄に囚われている閉塞感に悩みました。しかし、今日の説教の準備を通して聖書の言葉に救われました。

主イエス・キリストは、十字架で死に、三日後に復活された事で罪と死の力を打ち破られ、義と命をもたらしたお方であることを思い起すことができたからです。命の言葉を告げる使徒たちが牢獄から解放されたように、人の罪も死も、イエス・キリストを証する命の言葉を閉じ込めておくことはできません。だから、今、病と闘っている一人一人も、主イエス・キリストによって、死の力から解き放たれ、命から命へと移ることができる、神はそうして栄光を現そうとされている、今、罪にがんじがらめにされている人も、主イエス・キリストによって悔い改めへと導かれ、新たな命を得ることができる。人にはできずとも神にはできる。

そのために、神は私ども横浜ナザレン教会の一人一人を聖書の言葉によってきよめ、用いようとしている、という確信したからです。まさに、神の言葉、命の言葉は牢獄につながれてはおらず、ほかならぬ私ども、横浜ナザレン教会の一人一人によって宣べ伝えられて、罪と死に悩む人々へと広がっていきこうとしています。その為に私たちは選ばれ、この教会へと集められ、聖霊が注がれ、命の言葉が与えられています。

罪の現実に心くじけ、死に恐れおののき、気力萎える弱い私どもに、イエス・キリストの十字架と復活を示し、罪と死から解き放って、聖霊を注いできよめて、命の言葉を与え、御心のままに用いてくださる天の父なるみ神を賛美せずにはられません。祈ります。